

## 変 な 薬

ケイ氏の家にやってきた友人が言った。

「あなたは薬をいじるのが好きですね。いつ来ても、薬をまぜ合わせたり熱したりしている。なにかいいことがあるのですか」

「喜んで下さい。やっと、すごい薬ができました。これですよ」

と、ケイ氏は粉の入ったピンを指さした。友人はそれを見ながら聞いた。

「それはけっこうでした。で、なんの薬ですか」

「カゼの薬です」

「これまでのにくらべ、どんな点がすぐれているというのですか」

「いま、ききめをごらんに入れましょう」

こう言いながら、ケイ氏は少し飲んでみせた。友人はふしぎそうだった。

「ききめを見せるといっても、あなたはカゼをひいていないではありませんか」

「いいから、見ていてごらんなさい」

まもなく、ケイ氏はセキをはじめた。友人は心配そうにケイ氏のひたいに手を当てた。

「熱がある。これはどうしたことです」

「さわぐことはありません。これはカゼをなおす薬ではなく、カゼになる薬なのです」

「ぼかばかしい。あきれました。カゼをわたしにうつさないように願いますよ」

「それは大丈夫です。まあ、もう少しお待ち下さい」

一時間ほどたつと、ケイ氏のセキはおさまり、熱もさがった。友人はますます変な顔をした。

「もうなおったのですか」

「つまりですね、この薬を飲むと、カゼをひいたのと同じ外見になるのです。外見だけで、本人は苦しくもなく、害もありません。そして、一時間たつともとにもどるのです」

「妙なものをこしらえましたね。しかし、こんな薬がなにかの役に立つのですか」

「もちろんです。ずる休みに使えます。すなわち、いやな仕事をしなくてすむというわけですよ」



こう説明され、友人ははじめて感心した。

「なるほど、なるほど。それは便利だ。やりたくない仕事を押しつけられそうになった時は、この薬を飲めばいいのですね。すばらしい。ぜひ、わたしにわけて下さい」

「そろそろなさい。ほしくなったでしょう。いいですとも、少しあげましょう」  
小さなビンに入れてもらい、友人は喜んで帰っていった。

そして、ある日。こんどはケイ氏が友人の家をおとずれた。誕生日のお祝いをしたいから、ぜひ来てくれとさそわれたのだ。

その食事のちゆう、ケイ氏はふいに顔をしかめて言った。

「きゆうに腹が痛みました。悪いけれどこれで失礼します」

友人はあわてたが、気がついたように言った。

「からかわないで下さい。わたしの家にいるのが面白くないので、早く帰りたいというのでしょ。ゆっくりして行って下さいよ」

「いや、本当に痛むのだ」

ケイ氏の顔は青ざめ、汗を流し、ぐったりとした。しかし、友人は信用せず、笑いながらひきとめた。

「このあいだのカゼ薬以上によくできています。いつもカゼでは怪しまれますから、たまには腹痛にもならないといけませんものね」

しかし、一時間たってケイ氏は元気にならず、苦しみかたはひどくなるばかりだ。友人はや

つと、これは本物の病気かもしれないと考えて、医者呼んだ。かけつけてきた医者は、ケイ氏の手当てをしてから言った。

「まにあつてよかった。もう少しおくれたら、手おくれになるところでしたよ。しかし、なぜもつと早く連絡してくれなかったのですか」

このことがあつてから、ケイ氏は変な薬を作るのをやめてしまった。